

美術紀行「夢幻泡影パルミラ 古代シリアに花開いた栄華」
セブンシーズ 1989年6月号

シリアの砂漠に散った夢のかけら

遺跡逍遙

「パルミラです」案内役のO氏の声が車内に高く響き、私はとび起きた。

目の前に突然、異様なものがヘッドライトの光に浮かび上がり、まるで獲物を見つけた野獣のように私に襲いかかろうとしている。行く手には巨大な石の門がぱっくりと目を開けて待っている。薄闇の中に白い肌を浮き立たせたそれは、優美な線をくねらせて私を誘い込もうとしているかのようだ。

一瞬の間に私の心は奪われ、目は釘づけにされてしまった。「列柱です」「記念門です」と声は聞こえるのだが、返事をする事さえできない。そんな私の心の内を知ってか知らずか、O氏は「今日はもう遅いので、明日ゆっくり見ることにしましょう」とそっけなくいい、車をホテルに滑り込ませてしまった。

目が覚めると陽はすでに高く昇っている。昨夜の興奮がおさまらない私は、石の行列へと小走りに進む。近寄れば深閑とした森の木立に似て大木が凄まじく聳えたっているようだ。直系約1メートル高さ10メートルという巨大な円柱が往時には750本以上もあり、1キロメートルも続いたという。この列柱通りを歩き出すと商品を山と積んだ店先や旅装を解く人の群れが浮かんで来て、豊穡であった3世紀の頃を思い起こさせる。

円柱には腕木と呼ばれる一種の台がつけられていて、この都市の有力者たちの胸像がおよそ200体飾られていたという。その多くは散逸してしまい、今は一つも残っていない。地面に食い込んである石の塊は胸像の名残だというのが、白い花崗岩が風化し、薄ピンク色に崩れかけていて、教えられなければ気づかない。

「どうやってこれをあそこに載せたの」と石と腕木を指さしてパルミラの男に尋ねると、彼は「サンドバッグ」とさも当たり前のことを聞くという顔をして答えた。「どうして知っているの」と続けて聞いてみれば、かれの父はパルミラの歴史を調べる仕事をしてきたからだという。

砂袋を階段状に積み上げ腕木に到達させれば、巨石も用意にそこに届く。権力の階段を登りつめた成功者たちは、自分の胸像を空中高くに飾って力を誇示する時も砂袋の階段を登ったわけだった。人間が創ったものとは思えない程の美しい石柱の連なりから、急に人間の匂いがしてきたような気がした。

パルミラの美と力の象徴はベール神殿に最もよくあらわれている。最大の建築物であるこの神殿の境内は一辺約200mの正方形の周壁、コリント式の柱廊がめぐらされ、中央には本殿が建っている。本殿前に浄めの水槽や犠牲動物を備える祭壇を備え、また本殿入り口

や屋根には多彩な装飾や当時の儀式を描いた浮き彫りが見える。幽玄な神に献げるためにパルミラ人は、かくも華麗で重厚な神殿を建立したのである。

神殿が太陽神や戦術、豊穡の神などを祭っていて、政治や経済と深く関連している大きな信仰の形式であるなら、小さな信仰というべき祖先崇拜の形式が、遺跡の外側に広がる砂のうねりの中に見え隠れしている。それは「死者の谷」と呼ばれる墳墓群で、侘しいけれど清涼とした景観である。

近年、大型トレーラーの通行により道路が陥没し、地下式墓室の一つが偶然発見された。何階もありそうな塔形の墓の間に、未発掘の地下式墓室が多数眠っていて、それを全部発掘するには100年以上の年月が必要だとパルミラ人はいう。後世の人の楽しみのために残しておくべきというのが彼らの考え方で、発掘はゆっくりと進められているようだ。

墓室の内部の様子は少しずつ違っているが、ほとんどの場合天井や壁に画が壮麗に描かれ、正面には家族団欒の群像レリーフを載せた大きな石棺が置かれてある。三方の壁には奥行き2メートルの箱形の穴のような棚が何段にも仕切られていて、死者の棺をさしこむようになっている。パルミラ式の独特なこの方法を使えば一墓室に100以上もの棺を納めることが可能だ。家族や親戚、縁者の棺を集合させたこれらの墓室は「永遠の家」と呼ばれ、死後に現世同様の平和な生活を望んだパルミラ人の死生観をあらわしている。

パルミラ博物館の館長が「これは先週発掘したものです」といいながら見せてくれたものは、墓室の壁面を飾っていた10数枚のレリーフだ。それらは博物館の地下倉庫で弱々しい蛍光灯の光を浴びながら、無造作に置かれ、そこだけ1700年前の空気を漂わせている。

一体の目映い光を発している貴婦人の肖像が私を捉えて離さない。あたりが騒めいているのに彼女は静謐だが、白い胸はゆるやかに呼吸している。首、腕、耳、頭は宝石づくめで、溜息が出る程完璧な顔立ちを一層豪華にしている。眠りから醒めた目には何が映っているのだろう。彼女の香気がたちこめる中、幻想的な時間が流れ、見る者に至福の時を与える。

外に出ると暮れ残る空の過去の霧に覆われていた。取引場、円形劇場、広場と巡る内に、大粒の雨が降り出し雷鳴が轟き始めた。それは壮絶な死を遂げたパルミラの魂の叫び声に違いなく、廃墟に吹き渡る肅々たる風の冷たさと共に私を震わせた。

パルミラ滅亡

「パルミラ」とはギリシャ語の「パーム」(ナツメヤシ)に由来し、現在もこの地方ではナツメヤシやオリーブの緑が広がり、3万人余のシリア人がひっそりと暮らしている。

紀元前1世紀末から崩壊するまでの300年程、パルミラは中国とヨーロッパを結ぶシルクロード沿いの隊商都市として発展し、いろいろな国の人が隊商を組んで往来するとともに、様々な文化がゆきかい活気に溢れていた。金、象牙、石材、農作物、奴隷、絹織物

などすべての貿易品から関税を、さらに水の使用料、店や娼婦などからの営業税をも徴収したのでその力は強大となり、属州でありながらローマ帝国から自治権を持つことが認められた。

ペルシャ帝国とローマ帝国が勢力を二分していた3世紀の半ば頃、執政官（最高権力者）となったオダイナトは両大国の間で均衡政策をとりながら、パルミラにより一層の安定と繁栄をもたらした。

しかし254年、ペルシャのシャプール1世はこの均衡を破り、ローマ帝国に戦いを挑んだので情勢が変わった。262年、オダイナトはローマの援軍としてシャプール1世を背後から攻撃しペルシャに背走させた。

この功績によりオダイナトはローマ皇帝から数々の栄誉を授けられ「パルミラの王」と称されることとなりオリエントにおける権威を独占していった。ゼノビアはこのオダイナトの最後の妻であった。

オダイナトは絶頂期にあった267年、突然従兄弟によって先妻の子ともども殺害され、その後まもなく幼年の実子を王位につけたゼノビアが権力の座につくことになる。オダイナト殺害については、ゼノビアがオダイナトに反感をもつ従兄弟と共謀したとも、ペルシャ側あるいはローマ側の謀略によるものともいわれているが、確証はなく謎は解けていない。いずれにしても、ここからパルミラの悲劇が始まったのである。

ゼノビア女王のことを深く知る史料は乏しく、詳細はわからないが、ギリシャやローマの文献では「その美しさは西アジアにおいて最も美しく、顔色は浅黒く、瞳は黒くて異様に輝き、声は澄んで男のようであった。乗馬や狩猟を好み、家庭にあっては貞淑な女性であった」と記されている。貨幣の肖像を見ると、気品があって、首の細い華奢な感じでも国を滅ぼすような女性には思えない。

彼女には傑出した2人の側近がいた。一人は将軍ザブダーで軍事面での片腕。もう一人は大臣で哲学者で、ギリシャ語の家庭教師でもあったロンギノスだ。自ら「当方諸国史」を著し、すすんで歴史や文化を学ぶゼノビアにとって、頭脳明晰な上に雄弁術をも備えていた彼は、さぞかし魅惑的な存在だったろう。ゼノビアは次第に彼の考え方に強く影響を受けようになったに違いない。なぜなら、「人間は燃えるためにつくられた」とする彼の哲学はパルミラが燃え散ったことと符合するからだ。

自分の才能と美貌を信じすぎ、すでに冷静さを失っていたゼノビアは、ロンギノスからなおも想像力をかきたてられ、やがて「私はプトレマイオス家の子孫で、第二のクレオパトラである」と宣言するようになる。

ゼノビアがいくら知性的であったとしても、自分を見つめるもう一人の自分が存在しなければ、知性は失われたも同然だ。彼女にとって彼女を見つめるもう一人の自分とはロンギノスではなかったか。女王として、人間として自問自答しなければならない時に、いつも傍らにロンギノスがいたのではなかったか。彼は「火の消えた魂はすでに死んだ魂である」と先導的な言葉を用い、彼女の歪んだ夢想や賭博の炎に油を注いだ。

ゼノビアの欲望はとどまらず、270年、エジプトに軍を派遣しナイルからユーフラテスにいたる広大な地を手に入れ、とうとうローマ帝国に対して宣戦布告をしてしまった。ここまでくると皇帝アウレリアヌスも黙ってははいられない。ついに激烈な戦火の火ぶたが切られた。

しかしパルミラ軍はローマ軍に後退を余儀なくされパルミラに逃げ戻るものの、その守りは固く、アウレリアヌスを手こずらせた。西アジアからの救援を待っていたゼノビアはしびれを切らし、自ら夜の闇にまぎれベルシャを目指したが、ユーフラテス河畔で追っ手に捕らえられてしまった。272年の秋のことであった。

アウレリアヌスはローマの司政官をパルミラに残し、ゼノビアと遠縁の男を統治者とすることとし、ローマに向かったが、途中司政官に対する反乱が起こったと聞いて、取って返した。アウレリアヌスの怒りは爆発し、273年、パルミラは徹底的に略奪、破壊されてしまった。

2度目の反乱がなかったなら、パルミラは廃墟とはならず、4000年の歴史を持つダマスカスやアレppoーのように、オアシス都市として繁栄しつづけたかもしれない。しかし、パルミラの栄華はついに終わった。激しい攻防戦の後にはベール神殿と一部の建物が残っただけで、血なまぐさい臭いがいつまでも消えることはなかったという。

ゼノビアの最後については明らかでない。アウレリアヌスによってローマへ連行される途中、病死あるいは自害したともいわれる。またローマの凱旋式の時に金の鎖で市中を引き回された後、殺害されたともいわれる。別の説では、責任をロンギノスや他の大臣に転嫁し、ローマの議員と再婚、余生を安楽に暮らしたともいわれ、様々である。どんな結末であれ、遊牧民の娘から、王の后となり、ついには女王にまでなったひとりの女王が生を終えたことに相違ない。

パルミラには、いっさいの憂愁が棲んでいる。みつめる土地の底からは哀しい虚無感が滲んできて、私を放心させる。

砂漠断章

パルミラを後に再び車中の旅人となった。砂漠の景色は無限でつかみどころがなく単調だけれど、飽きるということがなくぼんやりとした時間が過ぎていく。春、一面若草色のじゅうたんを敷きつめたように草が芽吹き、群青色の空は果てしなく、ここにいればゆったりとした気分になれる。コーヒーもお茶も砂漠が発祥の地という。吹きぬける風は500キロメートルも離れたネフド砂漠からやってくる。時間も距離も空間も平常の感覚を超えている砂漠においては、人間の歴史など一瞬のまばたきみたいなものかもしれない。

目に飛び込む黒い点はベドウィン(遊牧民)のテント、一列につながる線は羊の移動だ。ずっと昔からベドウィンは羊や駱駝を連れ、草地を求めながら砂漠を自由に移動して暮らしてきた。

雑踏と妄想の都会に住む者たちは、砂漠の美しさを知らない。朝焼けに一日の憧れを燃え上がらせ、けだるい昼には長々と寝転んでまどろみ、夕焼けの眩しき色に心染めることもなく、ただ時代の人混みにまぎれて生きている。

「視界360度の砂漠でひとり夕陽を見るのが好きです。陽が沈む時、自分の影が一条の線となって地平線にまで延びていくのです。なんといいのかわからないのか……寂寥感というのか、孤独というのか……」とO氏が語尾を濁したまま呟いた。彼は在シリア20年の日本人獣医である。

普遍的で大きなものに触れなければ得られないことの重要性を、私たち忘れてしまっているようだ。偽りがなく、途方もない自然に抱かれて、「私」という小さな精神をさらけ出す時「自分」が見えてくるのだということをO氏は伝えたかったのかもしれない。

道端で溜まり水をくみ上げている二人のベドウィンの娘たちがいた。肌は浅黒く、瞳は黒くて、私にゼノビアを彷彿させる。ベドウィン出身のゼノピアも、この広漠とした眺めの中に身を置き「自分」を見たことがあったに違いない。しかし女王となってからは多数の財宝に囲まれ、一個の貝から2、3滴しかとれないという貝紫で染め上げた衣をまとい、宴会の時にはクレオパトラが用いた黄金の杯を手にし、豪華な宮廷生活を繰り広げていたという。

少女の頃の記憶は夢のようにおぼろげで、意識の背後に隠されてしまったのだろうか。記憶は不確かで、はかなくて、泡のように消えていってしまうものだろうか。見たこともこれから見るであろう行く末もすべてが幻だとしたら、人生は影のようなものだ。

時は移ろい、歴史は毎日塗り変えられているのに、人の上を通り過ぎる時間は太古の昔から同じで、重なりあって見える。ベドウィンの娘たちにも異邦人の私にも、ゼノピアと変わらない人としての時間が待ち受けている。そして、パルミラの土壁に恥ずかしそうにして消えたイスラムの女にも……。

遺跡は発掘によって蘇生し、私たちに語りかけている。人間の愚かさと儂さを。